

## 永安公司遊芸場「天韻樓」の閉鎖と上海市社会局

菊池 敏夫

### はじめに

1917～18年、上海の共同租界の中心を競馬場に向って東西に走る南京路の西端地区、すなわち南京路が浙江路と交差する辺りに先施公司、永安公司という2つの香港・広東系資本の百貨店が進出し、6～7階建ての大規模・高層ビルを建設して営業を開始した<sup>(1)</sup>。26年には、これらに新新公司が加わり、3者が揃って新しい街づくりを進めた。34年には永安が本館東の隣接する旧新新舞台・楼外楼の跡地に22階建てのアネックスを新設し、36年にはさらにチベット路との交差点に大新公司が地下1階地上9階の大規模・高層ビルをもって進出し、このエリアの百貨店は都合5棟の大規模・高層ビル群を形成した。この百貨店エリアが上海の新しい消費文化を切り開く商業空間として未曾有の繁華を極めたことはいうまでもない。そして、このエリアが同時に上海の新しい消費時代の都市娯楽施設と都市文化機能を蝟集した空間でもあったという点がとりわけ重要である。というのも、これらの百貨店は高級品を大量販売すると同時に、大規模ビルの上層階および屋上などを利用して成人向けの遊芸場を大々的に経営したのである<sup>(2)</sup>。上海の遊芸場は、專業のものもあったが、百貨店付属のものも、旧来の中国人富裕層だけではなく、新生の中国人中流階層、つまり上海の都市発展のなかで生活のゆとりをもつようになった階層＝新中間層にとっての社交場、歓楽境、遊び場的都市空間として、また都市娯楽や都市文化の消費市場として重要度を急速に高めていった。1920～30年代の上海では、これらの百貨店ビルが中国人のための都市娯楽・文化の創生装置の一つとして機能したのである。

永安公司ビルの5～6階、屋上にも、開業当初から遊芸場があり、これを「天韻樓」といった。宋鑽友によれば、そこは総合性のある遊芸場で、小規模の劇場、舞台を多数構え、同じく複数の映画館をもち、数多くのドリンクショップなどを配置していた<sup>(3)</sup>。また、天韻樓で人気を博した芸能は2つあり、1つは京劇、いま1つは蘇州、無錫、常熟の「灘簧」<sup>(4)</sup>、すなわち「説唱」と総称され、語りと歌唱からなる長江デルタの芸能であった<sup>(5)</sup>。天韻樓は、專業の遊芸場である「大世界」<sup>(6)</sup>や、百貨店付属の「先施樂園」、「大新遊樂場」などととも、1920～30年代上海の富裕層、新中間層に馴染みの、有名な歓楽スポットの1つであった。

ところが、日中戦争終結後、上海の統治を進めた国民党上海市政府は1946年4月に「風紀の乱れ」を理由に遊芸場の風紀の是正を求めた。永安公司は、この機を利用して、他の遊芸場に先立って天韻樓の閉鎖を表明した。しかし、天韻樓には従業員、男女の「招待〔ボーイ、ウエイトレス〕」<sup>(7)</sup>、「茶房」<sup>(8)</sup>、「攤販」<sup>(9)</sup>などの労働者たちが多数働いており、これら関係者の反対に直面し、繰り返しの交渉、調停を経て、ようやく天韻樓は閉鎖された。そして、この抗争の調停には終始上海市社会局が関わった。本稿では、この「風紀の乱れ」をめぐる抗争の実相に迫ることが課題である。

なお本稿は、多くをこの時期の各種新聞記事に依拠した考察であることをお断りしておく。以下で

は、まず 1920～30 年代の天韻楼の姿を一瞥し、次に 1945 年 9 月以後の社会局の活動概要に触れ、それらを踏まえて 1947 年 5 月における天韻楼閉鎖の歴史的、社会的背景を探ることにしたい。

## 一 日中戦争前の永安公司「天韻楼」

天韻楼遊芸場は 1918 年 9 月の永安公司開業直後から、永安ビル の 5～6 階、屋上庭園という相当に規模の大きなスペースを使って営業を始めた。当時永安公司の老板〔経営者：筆者注、以下同じ〕は郭標であった。彼は上海の富裕層が全市人口中に占める比率が高くはないことを踏まえ、上海 350 万人の「低級」市民をターゲットとした遊芸場構想に基づいて天韻楼の開設を計画した。彼のスローガンは「大衆娯楽」の提唱であった<sup>(10)</sup>。

その後、1920 年 8 月、屋上には屋上屋を架す形で天韻楼の新屋舎も増築され、施設は次第に充実していった。大劇場では「小京班」<sup>(11)</sup>の上演、映画館では最新の「長編映画」の上映が開始された<sup>(12)</sup>。1923 年の正月には、チャップリンなどが出演するアメリカン・コメディ映画も上映され、絶大な人気を博した<sup>(13)</sup>。1925 年 8 月には、開洛公司無線電話〔ラジオ〕局の舞台歌曲番組で天韻楼の「灘簧」<sup>(14)</sup>、「女校書」などが放送された<sup>(14)</sup>。同年 8 月 1 日の天韻楼の小報である『天韻報』掲載のプログラムを見ると、灘簧関係は「古裝蘇灘〔蘇州灘簧〕」（王美雲・王彩雲・張鳳雲、昼、午後 3 時半～5 時、夜、9 時半～11 時）、「常州灘簧」（陳桂芬・孫玉彩・周桂芬、昼、午後 2 時～3 時半、7 時半～9 時半）、「揚州灘簧」（新新社、8 時～10 時）、「女校書」は「群芳會唱〔合唱〕」（素珍・周翠雲・一枝花・瀛蘭・劉笑舫・周翠紅・樂第、午後 7 時半～9 時半）となっている<sup>(15)</sup>。この灘簧、女校書の放送は、その後多くのラジオ局の番組づくりに影響を与え、これらの芸能番組が上海の中国人の間で長く圧倒的な評判をとるきっかけとなった。天韻楼は同年 9 月には南エリアにさらに「大京班」〔京劇舞台〕を増設したが、これも観衆の人気を博し、とくに孫瑤芳、小桂芬という役者の評判が高かったという<sup>(16)</sup>。さらに 1926 年 4 月の『申報』記事によれば、「天韻楼屋上花園の映画館は、座席が広く、装飾も頗る華麗で、……」<sup>(17)</sup>とあり、映画館の設備は快適で、遊び客の心を満足させるものであったことが分かる。天韻楼は、休日ごとに遊び客が押し寄せるので、老板の郭樂はさらなる新屋舎の増築を計画し、1928 年 12 月に完成した。そこは「……華麗な映画館や京劇舞台を備え、極めて幻想的である。遊芸も欧米からやって来た若い女性によるダンスがあるだけでなく、巨編映画も上映するし、その他各種の遊芸も非常に優れている」<sup>(18)</sup>と評価された。こうして、1930 年代に入ると、天韻楼は、6 つの屋上家屋、11 の大きな舞台、6 つの入場券売り場、24 時間稼働の大型エレベーター 3 台を擁し、その全盛を極めた<sup>(19)</sup>。

遊客という人の回想によれば、1930 年代の天韻楼に思いをやれば、王无能の「独脚戲〔独り芝居、滑稽〕」、精神団、夏天人らの「鐘社新劇」、梁珊瑚・梁珊瑚の「桃花歌舞団」<sup>(20)</sup>などが観客の拍手喝采を浴び、広い会場は座席客、立ち見客でごった返えし、驚きの喝采や歓声があちこちの隅にこだまし轟いていた。当時の天韻楼「大京班」の続き物用のからくり装置やセットは、改良が進んだ 1940 年代の共舞台<sup>(21)</sup>や中国大戲院<sup>(22)</sup>に比べても負けていなかった。たとえば英雄や清官が危険な目に遭うと、舞台の照明が一斉に消え、場面は「四記頭」〔板鼓、大鑼、小鑼、鈸（シンバル）〕による打楽器の協奏に変わるが、その次の瞬間、からくり装置が動き背景が一変すると、客席の観客からは一斉にどよめきが起こった。この仕掛けは 40 年代になっても共舞台と中国大戲院でだけ観ることができた。また、このころは「小市民」の生活も比較的楽で、彼らはまだ時間的余裕、金銭的余裕の両方をもっていたし、それぞれの遊芸場も互いの競争のために、変わったことをやって集客に奔走していた<sup>(23)</sup>。

1937 年の日中戦争以前には、天韻楼だけでなく、大世界、小世界<sup>(24)</sup>、大千世界<sup>(25)</sup>、新新公司屋頂花園、先施樂園、大新遊藝場<sup>(26)</sup>など、上海の遊芸場は、いずれも人気を博し、労働者、店員、行商人、下級公務員などいわゆる「小市民階級」=新中間層の遊び客で極めて賑わった。彼らは、1 日の仕事を

終えると、清潔な衣服に身ごしらえして遊芸場に出かけ、そこで娯楽を楽しみ、疲れをとり、気持ちをリラックスさせたのである<sup>(27)</sup>。1926年2月24日『申報』の神仙世界<sup>(28)</sup>を採りあげた記事は、次のように伝えている。「人生の目的は娯楽を楽しむことにある。娯楽装置や遊芸場もその一部をなしている。上海は国際貿易の地であり、遊芸場が林立するのも時勢のしからしめるところである。」<sup>(29)</sup>遊芸場の繁栄の背景には、上海近代の経済的な発展のもとで新しい中間層が形成され、拡大したことがあり、彼らの大衆的で活発なエネルギーが社会的、文化的、娯乐的活動を希求したのである。

ところが、日中戦争が始まると、上海の遊芸場は坂道を一気に下り始めた。閉鎖するもの（大千世界）、改装するもの（新新屋頂花園は新都飯店となった）もあり、残りの遊芸場も息も絶え絶えで、パフォーマンス空間を初め、所属する劇団や登場する芸人の数も縮減されていった。他方、市民は、日常生活のなかで遊芸場のことを口にするのも稀となり、たとえ遊芸場に興味をもったとしても、彼らの懐具合がそこに向くことをなかなか許さなくなっていた。国難に直面して新中間層の生活環境は大きく変化し、何事においても質素を旨とするようになっていった。日本占領期に再び天韻楼を訪れた遊客という人によれば、入り口は浙江路側も、のち内戦期には閉鎖されることになる英華街側もこのときはまだ閉鎖されてはいなかったが、エレベーターは「節約」のために停止しており、労働者たちの待遇改善を求める標語が壁いっぱいにかかれ、パフォーマンス空間では独脚戯の歌い手が自ら歌詞を売って生活の足しにする姿があった、という<sup>(30)</sup>。これらは、天韻楼閉鎖の予兆であった。

## 二 日本降伏後における上海市社会局の主要業務

天韻楼の消滅に係わる具体的な経緯を考察する前に、1945年8月、日本降伏後の上海市社会局について一瞥しておかなければならない。

上海市社会局は日本降伏の直後、上海市政府の成立と同時に発足した。つまり、1945年9月7日、第三方面軍総司令湯恩伯が、続いて9日、上海市長兼市警備総司令錢大鈞がそれぞれ上海入城を果たすと、12日には日本の降伏と上海市政府の成立とを祝う儀式があり、旧汪精衛政府の権力機構を接收し引継ぐ作業が開始された。「錢市長、市政府各局長らは上海に来てから連日接收復員工作に忙しい。今朝〔9月12日〕は汪精衛政府とその建設、衛生、警察、教育、地政、経済、社会福利、財政など8局を接收した。この内、汪政府の「社会福利局」と「経済局」とが社会局によって接收された」<sup>(31)</sup>。

社会局の業務・管轄範囲は極めて広範囲に及んだため、その組織もいきおい大規模なものとなった。組織図はおおよ次のようであった。「局長・呉紹澍。副局长・葛克信。以下、経済处长、主任秘書、秘書、西文〔ヨーロッパ語〕秘書、総務处长、工商管理处长、劳工处长、社会組織处长、社会福利处长、农林渔牧处长、文化事业管理处长、人事室主任、専員、編集・審査、視察、技正〔技術官の一〕、技士〔技術官の一〕、各科科长。」<sup>(32)</sup>組織がかくも大規模であるにも係わらず、予算は大幅に不足した。これは社会局の「伝統的」な姿であった<sup>(33)</sup>。

数ある社会局の業務のうち、代表的なもの、本稿に関連するものを見ておく。

まず、新生活運動の流れを汲み、市民の社会生活や社会規範の充実、社会統合を目指して社会局が自身で主催したり、実施をリードしたりした業務に集団結婚式があった<sup>(34)</sup>。たとえば、社会局主催の「勝利記念集団結婚式」は1945年12月25日に中正路浦東大廈で挙行された。錢市長が立会人となり、儀式はシンプルななかにも厳かさを感じさせるもので、42組が参加した。社会局代理局長葛克信（何惕庵代）が証書を読み上げ、市長が結婚証書を授与するとともに、蔣介石委員長の著『中国の命運』を記念として贈った<sup>(35)</sup>。また1946年12月13日の『文匯報』によると、「上海市社会局主催の第4回集団結婚は、昨日午前11時から威海衛路の新生活倶楽部大礼堂で挙行され、呉国楨市長初め各界来賓200余人が出席し、22組が参加した」<sup>(36)</sup>とあり、社会局主催の集団結婚式がその後も継続して開催され

ていたことが分かる。しかし、同年12月25日には「上海市総工会〔労働組合〕は第1回集団結婚を12月25日に計画していたが、準備が十分でなく、1947年2月16日に延期した。場所は寧波同郷会中正堂を借り、証人は上海市社会局局长の呉開先氏にお願いしてある」<sup>(37)</sup>とあり、経済や社会の混乱が集団結婚式にまで影響したかと思われる事態も見られた。

次に、この時期の社会局にとって最重要の業務であった産業復興、労働・失業問題に関係した調査やそれに基づいた政策立案について見てみよう。

まず、産業復興政策である。市政府は各同業公会整理委員会を設置し、上海の諸産業の復興政策を模索した。対象となった業種は、「石炭業、製糸業、電気絹織物業、汽船業、五金〔金物〕業、絹織物業、華洋雜貨業、国産調味料製造業、スチール古鉄業、ブリキ製缶業、復業〔?〕、製糖業、理髪業、バネ椅子製造業、ガス灯製造業、花樹製造業」などであった<sup>(38)</sup>。しかし、復興政策としての成果は乏しく、労働者の失業問題も深刻化の一途をたどった。本稿が扱う天韻楼従業員、関係者の解雇と失業の問題も日本降伏後、アメリカ商品の大量流入によって上海における中国民間資本の復興の余地がほとんどないことに遠因があった。また、市政では、1945年11月に、第6次市政会議議案「上海市社会局工商業登記暫定規則」を可決した<sup>(39)</sup>。工商業の企業登記は社会局の伝統的業務として引き継がれていた。しかし、上述の事情から、企業登記数は多くはなかったと思われる。

次に、労働・失業問題であるが、社会局の調査活動で代表的なものの一つは「労働者・職員の生活費指数調査」である。それは時代環境の激しい変化のなか、紆余曲折を経て上海市社会局に引き継がれていった。『文匯報』は次のように述べている。

「上海市政府が編制している生活費指数調査の歴史は長くはない。その始まりは抗日戦争前で、〔当時の〕上海市社会局が始めたものである。国民党軍が奥地へ撤退したあとは、工部局がその欠如を補い、その後、太平洋戦争が勃発すると、この仕事は汪精衛政府下の上海市政府が担当した。日中戦争に勝利するとすぐに現在の市政府秘書処研究室の編制に移行した。……編纂を担当するのは蔡正雅先生で、……中国人労働者調査物品54種、中国職員調査物品93種、西洋人職員調査物品123種の調査を行い……」<sup>(40)</sup>

この調査は、各業種労働者の賃金水準と物価の変動を調査し、労働者の生活費と食糧価格の変動を通して労働者の生活状況を把握しようとしたものである。たとえば天韻楼の消滅に関係する時期について見てみよう。1946年2月から12月までの11か月間の平均でみると、2月を1として労働賃金の上昇は食糧価格上昇の0.512にとどまり、また1947年1月から1948年7月の間でも前者を1として0.599にとどまった<sup>(41)</sup>。急激な物価上昇のなかで労働者の生活条件が急速に劣悪になったことが分かる。この調査で失業者がどの程度考慮されたかは不明だが、天韻楼の消滅はこの期のかかる深刻な経済的事情と深く関係した。

この時期は、労働問題や労働者政策、失業対策が極めて重要であった。新しい上海市政府の行方もその失業対策の成否に係わるものとなった。社会局は労資間のトラブルの調停のために1945年12月、「上海工資〔賃金〕評議委員会」を立ち上げた。「労資争議に際して合理的な仲裁を行い、労働者の生活を維持することが目的で、労働組合、市党部、市商会、淞滬警備司令部、市警察局、市社会局から各1人、地方公正人士代表3~5人等で構成された。」<sup>(42)</sup>さらに、1946年5月4日には「上海市社会局労資評断〔評議〕委員会が成立し、その下に審議科と調査科の両科および専門スタッフ多数をおいた。」<sup>(43)</sup>労資評断委員会は社会局の附属機関の一つであり、社会局第八科と同様に労資争議の処理にあたった。

労働者福利施設に関する状況も劣悪であった。社会局は1946年4月、視察団を組織し、福利施設の実情の把握を目指すとともに、方策を提示した。

「社会局と衛生局、工務局が組織した劳工福利視察団は昨日〔1946年4月26日〕7組に分かれて視察を開始した。……全部で20数工場を視察したが、労働者福利施設はどの工場でも多くの欠陥をもっていた。社会局は最近、労働者福利施設要綱を発行・配付し、各工場に対し法に則って衛生設備およびその他の労働者福利施設を設置するよう命じている。視察は続行中である。」<sup>(44)</sup>

重慶から上海に戻った労働者の就業斡旋も深刻な事態に陥っていた。1946年6月、「後方〔重慶〕から上海へやってきた労働者1000余人が仕事を求めて再び社会局に請願をした。」<sup>(45)</sup>復員兵を含む人々であり、求職がまったくの期待外れで、社会局の警備警察と衝突し、混乱を来した。また、社会局は「労働者消費合作社計画」というものも企図し、1945年12月には「社会局は劳工の福利を図るため、消費合作社事業を推進し、労働者消費合作社の組織を準備すべく準備会を開催した。」<sup>(46)</sup>

物価対策については、早くも1945年12月初めに社会局のなかに物価高騰に関連する取り締まりや対策を担当する部署が設置された。すなわち「上海市評価〔物価評定〕委員会は即日組織され、成立した。該会の任務は物価を評定し、投機・操縦を取り締まることを主旨としている。内部組織は11人で構成され、社会局副局長葛克信が主席、市警察局長、市商会および主要日用品同業公会代表10余人を代表とする。」<sup>(47)</sup>また、1946年1月中旬には、社会局評価〔物価評定〕委員会の名義で以下のような指示を出した。「陰暦の年末が近づいていて物価はまた激しく動き出しているの、特に厳しく抑止しなければならない。該局は物価問題に従事しており、これを看過できない。中央市場および石炭業公会など18の主要商品商業社団に命ずる。……」「本市の物価は頻繁に高騰し、投機という悪習が跋扈している。主管当局も厳しく制止を命じているが、それがうまくいかなければ物価の前途は想像を絶するものになる。」<sup>(48)</sup>しかし、上述のとおり、物価の暴騰はやむことがなかった。

1946年6月下旬、国共内戦が勃発した。南京政府は内戦にすべての財力、戦力を集中したこともあって、上海の産業の復興や民生に関して上海市政府の力量は限定されたものとなった。1947年5月の状況を“*The China Weekly Review*”の記事は、およそ以下のように報じた。内戦の開始以来長いこと資金援助もないので、工場やその他の工商業の倒産数は増加することが予想され、かつ外国貿易も、国民政府が僅かに保有している外貨準備を使い果たした時点でただちにストップするであろう。他方、上海の失業者は日毎に増大し、市政府にとっては、これまでになく大きな問題となっており、正確な数字は入手できないが、失業者の数はこの2~3か月の間に激増し、その数が観測史上最大になるだろうことは完全に現実味を帯びつつある。また社会局は、去る3月には20万人前後の失業者が存在することを認め、この数字が2年ほど前の対日戦勝記念日〔1945年8月15日または同9月2日〕当時の約2倍にあたり、社会局スポークスマンも「初めての〔失業者〕100万人超え」という事態こそ実際には起きなかったものの、「上海には、つねに100万人近くの失業者がいる」と述べた。そして、この記事は最後に、産業復興や雇用・民生をめぐる動向の深刻さについて注意を喚起すべきであるにも関わらず、すべての労力を内戦に集中し、その他の問題を無視する市政府、南京の中央政府の政策は、「まったく近視眼的であり、現実逃避者のようである」と評した<sup>(49)</sup>。以上のような経緯のもとで、社会局の失業対策、労資争議の調停は一定の成果を上げながらも、事態を大きく改善するだけの力を発揮することはできなかった。

### 三 内戦期の「天韻楼」——「風紀の乱れ」——

上海は戦後の不況・インフレが極めて深刻となり、国共内戦の開始がそれに拍車をかけていた。1947年3月頃、天韻楼では、5つのパフォーマンス空間で営業が行われていたが、かつて6つあった入場券売り場は今は浙江路側の2つだけとなり、3台の大型エレベーターも節電のためすべて停まっているの

で、客は階段を利用して1階から6階、屋上の間を上り下りしていた。ただし、遊芸の種類は依然としてかなり多く、他の遊芸場が及ばないほどで、映画、京劇、常錫戲、越劇〔上海地方の戯曲劇〕、蘇灘、滑稽、魔術、卓球、ビリヤードなどがあった。

遊客という人の見学レポートを再度利用して、この期の日韻樓を見ておこう。やや長いものなので、かいつまんで紹介すると、以下のとおりである。

階段を上って6階の日韻樓に着くと、まず「勝利棋攤〔勝利碁会所〕」がある。壁には料金表が貼ってあり、一局20分で500元、5分経過毎に100元の追加料金が必要、見るだけなら300元とあるが、対局中の客は1人もいない。〔日韻樓の〕入場料2000元を払うくらいなら、ピーナッツと白酒を買って帰り、家で友人と一局やったほうがずっとよい、というわけであろうか。その先にあるのは「漢字占い」である。ある人が今年の運勢を見てもらっていると、6~7人がそれを取り囲んであれこれと言いついて騒いでいる。かつて賑やかだった「大京班」は、以前は何重にも入場整理用の柵で囲われ、整理券を買わないと入れなかったが、今はその舞台の脇の辺りは板で仕切られて卓球場になっている。舞台には諸葛亮がたった一人「鷲毛扇」〔ガチョウの白い羽でつくった扇〕を揺らし、わずかな観客が舞台を観ながら往時を懐かしんでいる。舞台は明らかに小さくなっている。「独脚戲〔一人芝居〕」の舞台も以前は十分な広さがあったが、今は機械仕掛けの装置も取り外され、「武行〔武劇専門の役者〕」が立ち回りをすることができるか心配なくらい狭い。比較的賑やかだったのは越劇の舞台であった。顔に顔料を塗った女形が肩に白い紙を掛け、赤いランタンを掲げ、鬼となって、ざんばら髪の二枚目を引き摺って舞台の上を早足でぐるぐる駆け回るといったものであった。それは大京班と比べて3分の1の大きさの舞台で、以前は蘇灘の類を上演した所である。その外側のベランダ風のスペースにはいくつかのテーブルが置いてあり、何人かの白粉を塗った「玻璃杯（女茶房）」が客を招いていた。日韻樓は日中戦争開始以来、徐々に営業成績が落ち込み、戦後の回復も芳しくないなか、その原因を老班・郭琳爽は風紀の乱れに求め、閉鎖を決定したが、それは口実に過ぎない。上海では「風紀が乱れている」場所ほど商売は繁盛するといわれてきた。風紀の悪化と日韻樓の閉鎖とは実際にはいかなる関係にあったのか。以前は映画館こそが日韻樓の「風俗エリア」であった。大部分の娼妓はここに集まって客待ちをしていた。しかし、今は夜10時になると映画館には誰もいなくなる。映画館は今では「風俗エリア」ではなくなっている。「風俗エリア」が屋上に移ったのかも知れない。屋上は以前文明戲を上演した場所である。上ってみると、文明戲はなくなっていて、常錫戲〔常州・無錫などの地方劇〕の役者が2人、少しばかりの客に向かって立ち回りをしていた。娼妓が2~3人ずつ固まっているのが分かる。かつてのごとく盛んに「取引」をする様子はない。彼女たちの服装は、通りで立ちん坊をする「野鷄」と変わらず、昔と比べてよくない。昔の娼妓が名家の令嬢さながらに、あるいは現在のパーティーガールさながらに着飾っていたのとは、大違いである。このように、老班のいう「風紀の維持」とは実は「風俗エリア」が衰退したということなのである。以前の全盛時代に真っ暗な映画館のなかや周辺でたくさん娼妓たちが本領を発揮した時代は過ぎ去ったのである<sup>(50)</sup>。

以上が遊客という人による日韻樓見学のまとめである。日韻樓の営業がすっかり衰微した様子が伺える。氏のレポートでは、肝心の「女招待」「玻璃杯（女茶房）」「娼妓」の間の区別がもはや明瞭ではない。1947年の内戦期には、それらの間の区別がかなり不明瞭になっていたとも考えられる。

さて、いわゆる「風紀の悪化」とは、この「女招待」「女茶房（玻璃杯）」や娼妓などの存在を言ったものである。日韻樓には、このほかにも果物売り、軽食売り、占い師などの商売人が100人余りいた。「攤販」と呼ばれ、この場所に入りを許されて、個別に商売をする人々であり、もちろん女性とは限らなかったし、日韻樓が直接に雇用する従業員ではなかった。それにも係わらず、日韻樓の「風紀」問題は彼らにとって死活問題であった。ただし、ここでは「攤販」については省略する。

そこでまず、日韻樓の「女招待」「女茶房（玻璃杯）」、娼妓について、その歴史を振り返っておこ

う。1926年の『申報』記事は、神仙世界という遊芸場の「女招待」について次のように述べている。「……神仙世界はすべての場所で女招待を使っている。女性を利用するのが一番よいからである。女招待たちが揃って袖無し長旗袍を着ると、逢う人はみな微笑み、それは遊び客の心を慰める。長旗袍の色は各階毎に異なり、2階は青緑色、3階はオレンジ色、4階は赤褐色である。夜ともなれば遊び客は雲の如くやって来て、混雑することきわまらない。」<sup>(51)</sup>新新公司屋頂花園や先施樂園など百貨店付属の遊芸場でも、1920年代末までにはすでに「女招待」を使っていた<sup>(52)</sup>。「女招待」の存在は、神仙世界だけでなく、広く1920年代後半から30年代末までの遊芸場の繁栄振りを物語るものであった。

天韻楼について、その正確な数字を得ることはできない。おそらく最盛期のことであろうが、男女の「招待」が300人余りいて、「女招待」はそのうち200人余り、映画館だけでも100人を超えていた、という報告がある。この「女招待」は、1920年代後半に天韻楼に登場し、客にドリンクを提供し、話し相手をする仕事に従事した。Christian Henriotによれば、上海では当初これらの女性は固定の賃金はなく、客がくれるチップを主な収入としていた。また時には客が飲んだドリンク代金のなかからコミッションを取っていた。彼女たちの労働報酬はおおむね2角～4角で、あとは遊び客の気前の良さによって変わった。他方、遊び客はさまざまなやり方で彼女から接待を受けることができた。当初は若い女性にとっても手軽に小銭を稼ぐにはよい仕事であった。しかし、彼女たちのなかには決して全員ではないのだが、さまざまな事情によって売春を行う者も現れた<sup>(53)</sup>。ただし、経済が悪化した日本占領期、内戦期に入って「女招待」の身分がどう変わったかはよく分からない。

次に、「女茶房（玻璃杯）」を見ると、「先施樂園、大新遊芸場は〔楼外楼、大世界と比べて〕少し遅れて開設されたが、……過去はまったく映画館の『玻璃杯』に頼って一部の客を引き寄せていた」<sup>(54)</sup>とある。「玻璃杯」とは「グラス」の意味で、先施や大新ではこの表現を使ったが、天韻楼では「女茶房」といった。彼女たちを利用する老板たちの意図は「女招待」の場合と変わらない。

天韻楼の「女茶房」という職業は開設当初から存在したのではなく、1930年に老板が天韻楼の発展を企図して採り入れたものである。初めは僅か数十人で、ただお客のために茶とおしぼりを運び、形ばかりの接待をするだけで、喫茶料金も当時は僅か1～2角に過ぎなかった。のち人数が日毎に増え、最多時には200余人に達した。1940年代に入ると、飲食物を売るだけでは稼ぎにならなくなり、容色を犠牲にする者や映画館における「女招待」のような大胆なやり方をする者も多くなり、「女招待」との職業的区別も明瞭ではなくなっていった。また、一部の者は姿を変えて娼妓にもなったという。

彼女たちはそれぞれが悲惨な運命を負っていた。年かさのいった者は見てくれもあまり良くはないのでダンサーやパーティーガールになる「資格」もなく、「低級」市民を相手にするしかなかった。彼女たちのなかのある者は人に嫁いだものの、夫に死なれ、また、ある者はタバコ工場や紡績工場をクビになったため、「女茶房」になった。また、ある者は夫が兵となって出征したが、帰って来なかったために、また、ある者は一家を養うことができなくなったために、子持ちであることを内緒にお茶サービスの仕事に従事した。そして、夫の失業が原因で「女茶房」となった者もいた。彼女たちの少なくとも3分の1は既婚者であるが、遊び客に本当のことは言わない。それを明かせば誰も彼女に茶のサービスを頼まないからだ。すべてがお金のためであった。彼女たちには他に活路がなく、この運命に身を委ねるしかなかった<sup>(55)</sup>。

さらにその他に、天韻楼のなかを始終行ったり来たりしている娼妓が最盛期には150人余りいたという。娼妓は当然従業員ではなかったが、天韻楼の「風紀」問題とその存否は彼女らの死活に係わる問題であった。

内戦期における天韻楼などの娼妓については、『新民晩報』による次のような指摘がある。「あの、解放2年前〔1947年〕に閉鎖した永安天韻楼の「天壇」<sup>(56)</sup>は、こともあろうに娼妓が公然と客引きをする場所であった。毎晩9時以降になると、ここには娼妓の列ができ、その数は遊び客と比べて2～3倍も

多かった。大世界でも、露天回廊と大京班の裏側はほとんど娼妓でいっぱい、ごろつきを後ろ盾に強引なやり方で客引き商売をやった。遊芸場はこれによって変質していった。<sup>(57)</sup>この記事は中華人民共和国成立以降のもので、「風紀の乱れ」が天韻楼の衰退と閉鎖の原因だとする立場をとっている。しかし、われわれは、やはり遊芸場の経営や娼妓の仕事と生活を甚だしく厳しいものとしたに違いない、当時の経済的、社会的環境により多くの注意を向けなければならない。以下に考察する。

1926～27年以前、天韻楼に娼妓の出入りはなかった。当時、老板の郭標は極めて力をもっていて、「租界警察が天韻楼の門前で娼妓を捕まえるのは我々の商売に影響する。租界警察が南京路の他の場所で娼妓を逮捕するのはよいとしても、天韻楼の門前で逮捕するのは絶対にやめなければならない。さもなくば納税を拒絶するまでだ」と嚴重に抗議したため、租界警察署は税収入を考慮して彼の要求を飲んだ。このときから、娼妓は自分の安全のために、しきりと天韻楼の入り口にひしめきあうようになり、天韻楼は娼妓たちの「租界の地」となった。のちに郭老板は重ねて天韻楼の「繁栄」ために、門外の娼妓の群れを全員無料で天韻楼に上らせるようになった。ここに至って娼妓の足跡も天韻楼のいろいろなエリアに遍く広がった。のちに公司当局は増収のために彼女らに入場券を買わせるようになった<sup>(58)</sup>。天韻楼と娼妓とは、極めて深い結びつきをもっていた。

天韻楼の娼妓は、路上で客を引く「野鷄」よりも上位のランクにあり、当初はみな二等娼妓で、上海ではこの種の娼妓を「淌白（とうはく）」と呼んだ。「淌白」は決して客と直接に「商売」の話はしない。遊び客の前で首をかしげ、妖艶なポーズをとり、眉をあげウインクをするだけである。もし客にその気があれば、彼女の後に付いていけばよく、客がこの風情を理解できなかつたり、その気がなかつたりしたときには無理強いはしない。「淌白」の「淌」とは、娼妓が客の前でわざと艶めかしく、しなやかに歩くことを形容したものだし、「白」は「青眼を送る」こと、つまり歓迎を意味している。彼女たちは専らこの「淌」と「白」だけを頼みとして客をとった。

1930年代、天韻楼の商売は確かに娼妓が上がってくることによって繁盛したし、娼妓たちの仕事も上々であったが、日本軍の占領以降は次第に悪くなっていった。上海の経済が日毎に窮迫し、天韻楼の遊び客の中心であった新中間層の地位の揺らぎが生じていた。いきおい遊芸場に対する需要も次第に減退し、遊び客の数も日毎に減少していった。皮肉なことに、その結果、天韻楼の娼妓たちの数は日毎に増えて、その動き方も「貧すれば鈍す」で、「淌」「白」のレベルを維持できなくなり、公然と「客引き」をせざるを得なくなっていった。これらの娼妓は大半が京滬杭鉄道〔南京・上海・杭州間鉄道〕沿線各地の出身で、蘇州、揚州が最も多く、上海も少なくなかった。上海近郊の農村も経済的疲弊が頂点に達しつつあったのである。そのなかで、ある者は悪い人間に誘拐されて売られ、ある者はだらしないダンサー、パーティーガールとなり、不幸な離婚妻の何人かは都市の見せかけの繁栄という誘惑に負けて自ら墮落していった。最初は生活のためだったが、後には感覚が麻痺し習慣となって、自分の力では抜け出すことができなくなっていた<sup>(59)</sup>。

1920～30年代には、天韻楼の遊び客の大半は街を流している店員、学生、労働者、下級職員などであったが、日本占領期、内戦期になると遊び客の「水準」が日毎に上がり、公務員がよく出入りするようになった。これは、1940年代初頭から新中間層の経済状態が日毎に劣悪な方向へ向かったことを意味した。某大学社会学部の研究者による一般「低級」市民の娯楽目的に関する調査結果によれば、遊芸場へ行く目的は7～8割が刺激を求めることにあった。その理由は、生活が空虚で、寂しく、退屈であり、そこ以外に行くところもない、というものであった。上海の遊芸場が閉鎖すれば、夜中、少なくとも2～3万の人々は行くところがなく、道路に押しかけて交通を阻害するだけでなく、「女招待」、「茶房」「攤販」や娼妓の仕事妨げることは明らかであった<sup>(60)</sup>。

最後に、「女招待」、「女茶房」、娼妓の職業が依って立つ社会的背景を考えておきたい。上海という近代の大都会において女性が職業をもつということは一体いかなる意味をもったのか。「孤島の繁栄」期



と呼ばれた 1930 年代末に書かれた『申報』の「上海的労働婦女」という記事はおよそ以下のように述べている。すなわち、上海ではごく一部の婦人だけが金持ちである。銀のスプーンを使って西洋料理を食べ、麻雀をし、映画を観、ダンスをし、百貨店でショッピングをする、そして、ときには恋愛をする。これが彼女たちの日常の「仕事」である。これとは反対に、上海には極めて多くの貧しい婦人がいて、毎日命がけで生活のために働いている。上海は格差都市に他ならない。極めてさまざまな方面で働く上海の職業婦人があるが、大多数が家庭を支えるために働いている。その職業は、花売り、ダンサー、会社勤めの女性職員、通りの露天商、紙銭売り、「阿媽」という他所の家の使用人など、まったく千差万別である。彼女たちは辛抱よく仕事をするし、一般男性と比べて能率が悪いわけではなく、ときには男性よりも多く稼ぐことがある。とくに上海が戦争に巻き込まれて以降は、無数の男性が失業し、生活が逼迫したので、多くの女性がいろいろな職業に就いて仕事をし、わずかなお金でも稼ぐを得なかったのである。たとえば上海では花売りの全部が「娘」なのではない。五十数歳の女性もいて花籠をもって街を売り歩く。きれいな格好をしているわけでもない。花売りでも上海と蘇州とは異なる。蘇州では花売りに名を借りて「怪しげなこと」をしているが、上海の花売りは蘇州人でもないし、美しくもない。幾人かは低級の酒場で花売りをしたり、「謎笑」を投げたりすることがあるが、大多数は街頭に立ち、髪を振り乱して働いているのであって、男性の心を夢中にさせることなどできるわけがない<sup>(61)</sup>。以上は上海経済が絶好調だった時期の労働事情である。もちろん、この記事の地域間比較に関する記述を額面通り受け取ることは危険だが、上海の都市生活が、好況期ですら、このような婦人労働の存在を抜いては成立しえなかったという点が重要である。そして、かかる婦人労働のなかに「女招待」、茶房、娼妓などが含まれていたことは言うまでもないし、内戦期の大量失業とハイパーインフレのもとで、彼女たちの生活条件が極めて急速に劣悪化したことは推して知るべしであった。

#### 四 天韻楼閉鎖の顛末

天韻楼閉鎖までの経緯を見ることにしよう。

天韻楼の営業成績悪化をもたらした直接の原因は、社会階層としての新中間層が崩壊の危機に瀕していたことにあった。つまり、日中戦争、日本占領期における日本と汪精衛政府による政治的、経済的打撃、内戦期における内戦優先の財政と法幣価値の暴落、労働賃金の低下、物価の高騰、そして工商業の不景気など一連の政治的、経済的危機のなかで、これまで都市社会におのれの地歩をようやく固めつつあったかに見えた上海の新中間層も大量失業や社会的地位の後退に直面していったのである。彼らは賃金のなかに当然含まれるはずの最低限の娯楽費さえも、米を買う費用に充てなければならなくなっていた。労働者、店員、行商人、下級公務員の日常生活は、日中戦争開始後十数年を経過する過程で大きく変化した。

大世界、天韻楼、先施楽園、大新遊芸場は上海の「低級」市民、すなわち新中間層のための廉価な娯楽の空間であった。「低級」で廉価であるため、いわゆる上海の富裕層が出入りする「一泊百万金の公開妓院」などと比べれば「風紀の乱れ」がいっそうひどいと見られていた。国民党上海市政府は 1946 年 4 月にそのことを理由に遊芸場における風紀の是正を求めた。新聞記事によれば、天韻楼の老板郭琳爽は、風紀の保護という筋の通った非難に頗る心を動かし、恥のあまり「放蕩息子が大いに改心する」といった体で、同業者と一緒に共同で風紀を守っていこうという態度を表明した、という<sup>(62)</sup>。天韻楼は、かかる「自覚的な」遊芸場の先鋒で、1947 年 2 月には当局の風紀維持政策に協力を表明し、自発的に営業を停止しようとした。

まず天韻楼の労働者たちの動きと言い分は次のようであった。

「1947年2月18日、天韻樓の労働者代表200人は、今朝大型トラック3台に分乗して社会局に出向き請願をした。営業停止になれば労働者全員が失職するので、資本側に対して、引き続き営業し労働者が生計を維持できるよう指導すべく求めた。現在社会局は既に調査を終え、処理を進めている。永安公司の天韻樓遊芸場の歴史を振り返れば、開業から今日まで、既に20余年の歴史がある。去年4月、公司是『風紀を肅正するため天韻樓を閉鎖・回収して自ら用いる』という口実でその営業を停止しようとしたため、労働者たちは非常に驚いた。その後社会局の調停を経て、10か月間の営業延期を決めていたが、今月〔2月〕末に満期を迎える。」<sup>(63)</sup>

「労働者代表は、『われわれの平素の収入は単に糊口をしのぐ程度で、一つとして蓄えはなく、住むところさえない。たとえ街頭で露店を出しても当局が取り締まるし、他に生計を立てる方法がない。労働者とその家族はとても多い。われわれは会社が社会秩序を重んじ、労働者が失業する痛苦を顧慮して営業を続けるよう切に望んでいる』と述べた。風紀問題については、彼らはこう公言した。『政府の規定に照らして嚴重に整理して欲しい。現在大世界、先施、大新などの遊芸場が営業しているが、天韻樓の性質はこれらの遊芸場と変わらないのに、公司是風紀の乱れを肅正すると称して営業を停止しようとしている。会社が天韻樓のエリアを回収して別の用途を準備していると言うに至っては、これまた言い訳であって、第2回の調停のとき、彼らが転用するとしたエリアは今もって何にも使われてはていない。以上から、資本方のいう営業停止はまったく根拠がない。』」<sup>(64)</sup>

社会局の関係部署は、労働者の失業を回避しようとする立場から資本側と交渉した<sup>(65)</sup>。そして、労働者たちによる、社会の「世論」に反した行動が差し当たりは暫定的な勝利を得て、老板は、社会局の指導の下、3月1日から2か月間の営業継続を認めた。天韻樓の労働者たちも、以前に一度は時が来たらここを退出すると約束したものの、その後も上海の経済的、社会的環境が好転しなかったため、転職・転業も見通しが立たずにいたのである<sup>(66)</sup>。

天韻樓の労働者、男女の「招待」「茶房」、そして「攤販」は都合約600人で、その家族は約8000人と見積もられていた。彼らは、この20年間、すべての生活がこの「風紀を乱すもの」の上に依存してきた。彼らも「風紀」を乱したためにご飯を食べないという訳にはいかない。彼らが風紀を守ろうとすれば、職を失い、餓死するほかない。このため、彼らもまた社会局に出向いて請願しなくてはならなかった。『文匯報』によれば、「天韻樓の露天の売店や小売りの商人たちは営業の継続を求めているが、2月末日、呉国楨市長の仲介で労働組合〔天韻樓労働者〕、場方〔資本・老板〕、露天商三者の会談をもち、そこで場方が営業継続の意向を示した」<sup>(67)</sup>とあり、最終的には、これら三者の協議によって営業の継続が決定されたことが分かる。とりわけ社会局を超えてなされた市長の仲介は事態の緊急性と深刻さを物語っている。

天韻樓は永安公司の付属施設であるが、永安公司との借用契約に基づいて自主独立の運営がなされていた。閉鎖をめぐる前回の協議を経て、新たな借用期限は1947年3月1日から2か月間で、4月末には再び満期を迎えた。全体労働者600余人は2か月の時間的余裕を得たが、相変わらず経済は好転せず、転職できる希望はなかった。満期が近づく恐怖のなかで、彼らは南京の国民党中央政府に代表を送り、請願したが、具体的な成果はなかった<sup>(68)</sup>。

1947年5月1日、天韻樓はついに営業停止となった。労働者や「招待」「茶房」「攤販」たちによるハンガーストライキが始まり、事態は混沌とし始めた。ストライキ5〜6日目の状況は次の通りである。

「600人の労働者が天韻樓の内部にいるが、食料はなくなっている。病気の者が男女十数人に及んでいる。映画館の中は老若男女が雑居し、女、子供は泣き叫んでいる。5日過ぎて、天韻樓の遊

び客が見かねてパン、米、菓子、タバコなどをカンパするが、なにしろ人数が多く、物は少ないので十分には行き渡らない。労働者たちは昼にパン一個、夕方に薄粥を一すすりするだけである。」<sup>(69)</sup>

「永安公司天韻樓の労働者代表十余人は今朝再度市政府に出向き、資本側に継続営業を命じるよう請願した。労働者たちは物を食べずに今日で6日になる。張静英なる者は四十数歳の婦人であるが、娘が失業したことによって生活の拠り所がなくなり、そのショックが大きすぎて気が変になってしまった……、また労働者張永生の妻は夫がこの5日間、収入がなかったため生活に困り、飢えて気を失って倒れた。……中国紡績公司是それぞれ工場代表を送って慰問し、酒菜業労働組合は義捐米3石を贈った。日頃天韻樓で商売をしてきた「小姐」たち〔娼妓たち〕を指すか)も、ほどこしは人後におちなかったが、経済的には苦しいので大きなパンを贈るにとどまった。」<sup>(70)</sup>

『申報』も「永安の天韻樓は『風紀維持』の関係で5月1日から営業を停止した。聞くとところによれば、600人の労働者が楼内に籠城して5日が経ち、日頃の備蓄は使い果たし、現在すべての食料はわずかに同情士の支援に頼るだけである」<sup>(71)</sup>と報じた。5月6日、午前呉鉄城市長は天韻樓遊芸場の労働者の代表・王億銘、顧振声ら8人と会った<sup>(72)</sup>。王億銘らは謁見後、「市長は永安公司側と相談し、天韻樓はあと3か月間営業を継続すること、営業面積を3分の1に縮小すること、を取り決めた。ただし、天韻樓はすでに5分の2まで縮小されているし、延長もわずか3か月では再度の延長を求めることになろう」と述べた<sup>(73)</sup>。労働者たちは、ハイパーインフレのなかで生活を維持するために営業の継続を求め、「天韻樓死守」で、結局12日間にもわたるハンガーストライキを粘りとおした。労資双方は改善を進め、各戲班〔劇団〕の役者給金を現行の150%まで増やすこと、映画の水準を向上させること、衛生に注意すること、労働組合が秩序維持のためのピケ隊を組織し、客を騙すような行為があれば、ピケ隊に通報すべきことなど、資本側のいう「風紀」の改善や維持に関する取り決めも決定した<sup>(74)</sup>。

呉市長の強力な仲介によって、天韻樓は再開されることになった。ただし、遊芸場北側エリアの一部を譲り渡すことには労働者たちも同意せざるを得なかった。また、双方は5月16日の営業再開を決定したものの、天韻樓の労働者たちはすでに全員が退去してしまっていたので、早急に態勢を整え、営業再開に備える必要があった<sup>(75)</sup>。しかし、労働者側も、営業再開に向けた態勢をつくることは至難で、生計を立て直す見通しも立たなかった。

最後に、天韻樓の「風紀」騒動を取り巻く周囲の状況をいくつか見ておきたい。まず、1946～47年における南京路の百貨店をめぐる経営環境は極めて厳しいものであった。

「四大公司是、表面は賑やかだが、内情は物寂しいものである。つまり見る人は多いものの、買う人が少ない。従前〔日本占領期のインフレ状況下の様子〕を指す〕は商品が並んでいても売ろうとはしなかったが、現在は商品が並べてあっても売れないという状況である。南京路は車、人がひしめき、特に永安、大新など何軒かの百貨店の付近は特に混雑がひどい。小市民は暇と退屈をもてあまし、その多くが賑やかで騒がしい街を足の向くままぶらぶらするのが好きなのだ。またある者にとっては四大公司のなかを行ったり来たりすることも憂さ晴らしとなるのだろう。」<sup>(76)</sup>

また、「風紀」騒動のさなかの1947年2月に、上海市社会局は、物価が暴騰し、一般の賃金労働者の蒙る影響は極めて大きいという理由で、特別に生活安定、物価抑制のための第一歩として「配給処理法」を立法化すべく計画し、配給品目と配給対象を決定した<sup>(77)</sup>。

さらに、1947年3月、失業労働者は25万人に達した。工商業が不景気で、新たに倒産した工場もあ

り、また大多数の工場でも新たに労働者を解雇したからである。社会局も、この数値は「社会の危機」というべきものであり、失業対策は、最早「就業」などではなく、「救済」以外にはない、と表明せざるを得なかった。ただ、「救済」は工務局の協力が不可欠で、実行できる見通しはなかった。社会局は失業労働者の実際状況を調査するために、各労働組合に失業労働者の登録手続きを命じた。また、失業労働者輔導委員会が放出した救済小麦粉は6万人の失業者が受け取っている、ということであった<sup>(78)</sup>。

1947年6月の生活指数は、1936年5月末の2万3500倍となり、工場管理者と労働者の対立も全面的なものへと発展した。社会局には、日々数百人の労働者が集ったが、警官はこれを追い払うようになった。工場管理者は新しい生活水準に見合った賃金の支払いを拒否し始めた<sup>(79)</sup>。

以上から、労働者たちが天韻楼の存続を求め、たとえそれが実現したところで、天韻楼がまともな経営を行える環境はすでに失われていたということができよう。また、社会局による配給制度や労働者救済という新しい政策の模索も、上海の経済的、社会的危機の深刻さを示す以外の何物でもなかった。

## おわりに

天韻楼閉鎖の原因は「風紀の乱れ」であったのだろうか。日中戦争が終結して2年経ったが、上海の各種産業は復活できず、雇用は減退し、失業が拡大した。物価の高騰も天井知らずであった。南京路には人と車がごったがえしていたが、天韻楼は、給与所得者を初めとする新中間層の経済的、社会的地位が衰退するなかで、経営を悪化させ、全体の規模を縮小していった。いきおい「風俗エリア」も縮小したのであり、「風紀の乱れ」も減少したのである。

そのなかで、公司当局から「風紀の乱れ」の根源とされた「女招待」、「女茶房」そして娼妓たちは、実際には、それぞれの活動のスケールを縮減せざるを得なかったし、その収入は減少し、暮らし方も劣悪化して危機的領域に入っていた。前出の遊客という人の報告にあるように、彼女たちの間で「風紀の乱れ」がひどくなったという事態は確認できない。むしろ、この報告は、天韻楼がうらぶれた状態に衰微したことが原因で、彼女たちの「風紀」もうらぶれた状態に衰微するほかなかった、と読み取るのが適切であろう。「乞食の断食」ということわざがある。しかたなくしたことを、ことさら心がけてのように殊勝げに言うことのとえとして使われる。天韻楼の閉鎖は、永安会社が風紀問題の解決に積極的に対応した、すぐれて高い社会性、道徳性を備えた経営判断のように見えながら、実は経営の行き詰まりを国民党上海市政府の政策意図に便乗して解消しようとしたもの、つまり「乞食の断食」であったとみるのが至当である。

社会局は、天韻楼の労資抗争と「女招待」、「茶房」および「攤販」を含む失業問題に対して懸命に調停などを試みた。しかし雇用を長期にわたって持続し、失業者を生み出さないという形での解決は困難で、財源不足などによって、その統治能力には初めから翳りと限界が透けて見えていた。さらに、中国民間資本の復興がままならず、重量級インフレが重圧を強めるなかで、内戦を優先した国民党および上海市政府は上海経済の復興や再建とは正反対のベクトルへと進んでいった。

天韻楼は1947年5月に済し崩し的に閉鎖され、その後は唯一残った「大京班」の舞台を改造して天韻劇場とし、映画を上映した。この閉鎖によって、上海の著名な遊芸場は先施樂園、大新遊楽場、大世界の3か所だけとなった<sup>(80)</sup>。

## 注

- (1) 因みに外灘のビルで先施、永安ビルよりも早く登場したのはパレスホテル（1906年）、大北電報公司（1907年）上海俱樂部（1909年）、亜細亜石油（1916年）など少数で、規模も小さかった。大規模・高層建築として有名なものとしては、匯豊銀行が1923年、上海海関が1927年、サッスーンハウスが1929年の完成で

- あった。
- (2) 香港、上海の百貨店をモデルに1927年開業した天津の中原公司も、6階建ビルで、1～3階が売り場、4～5階がダンスホール、遊芸場、映画館、レストラン、6～7階が屋上庭園であった（天津市檔案館等編『旧天津の日租界』天津人民出版社、2012年、270頁）。このようなビル活用は中国の沿岸大都市における香港・広東系大規模百貨店の共通した特徴である。
  - (3) 宋鑽友『永安公司与上海都市消費（1918-1956）』上海辞書出版社、2011年、85頁。
  - (4) 物語、時事などを伴奏付きの韻文で歌う地方芸能。長江三角州地方に始まり、のち地方劇に発展した。さらに上海に伝播すると「滬劇」に発展した。
  - (5) 宋鑽友、前掲書、86頁。
  - (6) 中医の眼科医で新新舞台・楼外楼、中法葯房、新世界の創設者であった黄楚九が1917年、フランス租界八仙橋に創設した上海最大の遊芸場。1931年、黄の死後、青幫の頭領である黄金榮の手に渡った。
  - (7) 「招待」は「接待員」のこと。「女招待」は日本の「カフェ女給」に近い存在であった（『申報』1931年9月18日の記事「扶桑雜記」では日本の「カフェ女給」を「女招待」としている）。
  - (8) 茶の販売員。
  - (9) 露天商人、担ぎ売り。国民党市政府は民生が困難であることを顧みず、街中でも「攤販」が「街の景観を害す」とし、「交通整理」を口実に取り締まり、1946年7月からまず「攤販」営業の時間と場所とを制限し、その後、さらに販売品目も制限した（中共上海市委党史資料徵集委員會等編『上海店員和職員運動史』上海社会科学院出版社、1999年、810頁）。
  - (10) 「百戲雜陣群鶯亂飛 天韻樓頭一頁滄桑」『新民晚報』1947年3月31日。
  - (11) のちに大人気となる京劇である「大京班」に対する表現で、少数の楽器と演者で上演する京劇のこと。
  - (12) 「天韻樓新屋將開幕」『申報』1920年9月6日。
  - (13) 「天韻樓開映美国新影片」『申報』1922年12月31日。
  - (14) 「無線電話播送消息」『申報』1925年8月11日。「蘇灘」は「蘇州灘簧」の略。注4参照。「女校書」とは、本来は「詩文が作れる文学的素養のある妓女」の意味で、男女の社交に関する特別な訓練を受け、専門的な技能をもつ妓女をいい、ランクは「娼」より高いとされる。ここでは妓女による「灘簧」を指す。
  - (15) 『天韻報』1925年8月1日。
  - (16) 「游芸消息」『申報』1925年9月10日。
  - (17) 「游芸消息」『申報』1926年4月18日。
  - (18) 「劇場消息」『申報』1928年12月4日。
  - (19) 「百戲雜陣群鶯亂飛 天韻樓頭一頁滄桑」『新民晚報』1947年3月31日。
  - (20) 1920～1940年に上海で活動した歌舞団の1つ。
  - (21) もとは大世界のなかにあった京劇専門の劇場。上海四大京劇舞台の一つ。1207座席。
  - (22) 3階構造の客席2380席、弧形の舞台をもつ。フランス租界にあった。
  - (23) 遊客「荒涼敗落的永安天韻樓——從遊藝場的盛衰看市民生活」『評論報』1947年15期（4月）、12頁。
  - (24) 南市の現福佑路に1918年開設。開設時は「勸業場」といった。
  - (25) フランス租界聖母院路（現瑞金一路）に1933年9月開設。
  - (26) それぞれ新新公司、先施公司、大新公司の遊芸場。
  - (27) 遊客、前掲論文、12頁。
  - (28) 福州路と湖北路の交差点に1926年開設。
  - (29) 「紀神仙世界」『申報』1926年2月24日。
  - (30) 遊客、前掲論文、12頁。
  - (31) 「市府各局派員 今晨接收偽政府」『文匯報』1945年9月12日。
  - (32) 「市社会局人選決定」『文匯報』1945年10月1日。
  - (33) 李鎧光の本誌掲載論文「潘公展と上海市社会局」を参照。
  - (34) 虞建新「吳鉄城——大上海計画の推進者」日本上海史研究会編『上海人物誌』東方書店、1997年、36～38頁も参照。
  - (35) 「勝利集團結婚」『文匯報』1945年12月26日。
  - (36) 「四屆集團結婚 吳市長証婚」『文匯報』1946年12月13日。

- (37) 「集團結婚誤佳期 失業軍官竟做賊」『文匯報』1946. 12. 26
- (38) 「各同業公會成立整理委會」『文匯報』1945年10月21日。
- (39) 「市政會議通過要案多件」『文匯報』1945. 11. 3
- (40) 「生活費指數編制的商榷」『文匯報』1946年6月11日。
- (41) 李鑑光『內戰下的上海市社会局研究(1945-1949)』台湾學生書局, 2012年, 252-267頁。
- (42) 「組織工資評議會 預防勞資糾紛」『文匯報』1945年10月24日。
- (43) 「勞資評斷委會 從事調查工作」『文匯報』1946. 5. 15
- (44) 「社会局將飭各工廠 舉辦勞工福利」『文匯報』1946. 4. 27
- (45) 「后方失業工人 与社会局門警衝突」『文匯報』1946. 6. 1
- (46) 「工人合作社」『文匯報』1945年12月28日。
- (47) 「評僱會成立 取締投機操縱」『文匯報』1945年12月3日。
- (48) 「物價又起漲風 社会局決嚴勵制止」『文匯報』1946年1月17日。
- (49) “Shanghai’s Unemployed”, *The China Weekly Review*, 1947. 5. 31
- (50) 遊客, 前揭論文, 12~13頁。
- (51) 「紀神仙世界」『申報』1926年2月24日。
- (52) 新聞記事では事件に関連して登場することが多い。たとえば「新新公司女招待 方愛玉昨被暗殺」『申報』1929年6月20日, 「女招待已傷重身死」『申報』1929年6月22日, 「女招待与客同居」『申報』1930年7月12日, など。
- (53) 安克強 (Christian Henriot) 『上海妓女』上海古籍出版社, 2004年, 112頁。
- (54) 「大世界幾經變遷 哈哈鏡至今無恙」『新民晚報』1950年1月2日。
- (55) 「百戲雜陣群鶯亂飛 天韻樓頭一頁滄桑」『新民晚報』1947年3月31日。
- (56) 天韻樓屋上に造られた, 北京の天壇を模した建築物。
- (57) 『新民晚報』1950年1月2日。
- (58) 「百戲雜陣群鶯亂飛 天韻樓頭一頁滄桑」『新民晚報』1947年3月31日。
- (59) 同上。
- (60) 同上。
- (61) 新亮「上海的勞働婦女」『申報』1939年6月23日。
- (62) 「百戲雜陣群鶯亂飛 天韻樓頭一頁滄桑」『新民晚報』1947年3月31日。
- (63) 「去年所訂統辦期已滿游藝場又要停辦」『新民晚報』1947年2月18日。
- (64) 同上。
- (65) 「天韻樓頭絲管可統」『新民晚報』1947年2月20日。
- (66) 「天韻樓決定關門」『文匯報』1947年2月21日。
- (67) 「天韻樓 可能不關門」『文匯報』1947年3月1日。
- (68) 「天韻樓 租期又滿」『新民晚報』1947年4月13日。
- (69) 「天韻樓非声」『新民晚報』1947年5月5日。
- (70) 「天韻樓貧婦發瘋 酒菜業雪裏送炭」『新民晚報』1947年5月6日。
- (71) 雷克「天韻樓的悲劇」『申報』1947年5月7日。
- (72) 「天韻樓貧婦發瘋 酒菜業雪裏送炭」『新民晚報』1947年5月6日。
- (73) 「市長為貧民請命 天韻樓再開三月」『新民晚報』1947年5月7日。
- (74) 「天韻樓復業內部大革新」『新民晚報』1947年5月18日。
- (75) 「天韻樓頭清音復起」『新民晚報』1947年5月14日。
- (76) 「表面熱鬧 裏面蕭條 今日四大公司」『文匯報』1946年8月22日。
- (77) 「公教人員配給实物 团体学校需要食米 可申請社会局配給」『文匯報』1947. 2. 15
- (78) 「失業工人廿五万人」『文匯報』1947年3月26日。
- (79) “Labor”, *The China Weekly Review*, 1947. 6. 21
- (80) 上海市黄浦区志編纂委員會編『黄浦区志』上海社会科学院出版社, 1996年, 1209~1210頁。